



TITLE:

実践型地域研究ニューズレター：ざ いちのち No.37

AUTHOR(S):

京都大学 生存基盤科学研究ユニット 東南アジア
研究所：在地と都市がつくる循環型社会再生のた
めの実践型地域研究

CITATION:

京都大学 生存基盤科学研究ユニット 東南アジア研究所：在地と都市がつくる循環型社会
再生のための実践型地域研究. 実践型地域研究ニューズレター：ざいちのち No.37. 実践
型地域研究ニューズレター：ざいちのち 2011, 37

ISSUE DATE:

2011-11

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/148441>

RIGHT:

まちやむら、そこに住むひとと（ざいち）の、
知恵や生き方（ち）から学び、実践する活動です。



京都大学

学際融合教育研究推進センター 生存基盤科学研究ユニット
東南アジア研究所「在地と都市がつくる循環型社会再生のための実践型地域研究」

京都市左京区北白川
京都大学農学部

守山フィールドステーション

機械化以前のコメ作り：「種おろし」と

田植えの日雇い調達

守山 FS 研究員 藤井美穂

戦前から 1980 年頃まで、開発集落で使った米の品種は、早稲と中稲が旭 27 であり、晩稲が旭 20、千本旭、治田旭だった。これらの米の反収はいずれも 7 俵だった。「種替え」といって、異なった田で獲れた種モミを植えると、収量が増えると言われていた。「稲の種はよその種と替えよ」というのは年寄りの百姓の言葉として、A さん(男性 85 歳、以下の語りは A さんによる)は聞いていた。「今年いっぺん、種替えてくれよ」と近所に呼びかけて、3 反分計 9 升（1 反あたり 3 升）の種モミを交換して田に植えたことがあったが、面倒なので「種替え」をしなくなったという。種モミはカマスに入れて納屋のハリにつって保管して、ネズミの害を防いだ。

4 月 10 日頃までに種モミをカマスに入れて、里川に 10 日間つけて発芽させる「種おろし」を行った。「発芽はメキリというて、芽がピツと切りよる。間のない人(時間のない人)は、風呂の残り湯の中に種モミを浸した。湯の温度は人肌ぐらいで、消毒も兼ねており、種モミは 3 日間で発芽した。ドッコイショ(自噴井戸 ニューズレターNo. 19 号参照)の水を使う場合は、その水が暖かいので、5 日間で発芽した。1 反あたり 3 升の種モミを使った」。

5 月、2 畝(2a)の苗代を家の近くのドボゲ(湿田)につくり、そこで稲の苗を 15~20cm くらいになるまで育てた。戦前、苗の葉に害虫が卵をうみつけるので、「田の虫とり」が小学校の行事として行われた。3 年生から 6 年生の児童が、午後から 1 日だけ 1m の竹で苗の葉をなでつけて害虫を駆除したことがあった。

6 月 20 日頃から田植えが始まった。田植えの前日または当日、女性が苗代から苗取りを行い、男性が苗を田に運んだ。田植えは、嫁、若嫁などの女性が行ったが、男性でも器用な人は田植えをしていたという。

当時、A さんの家では、1 町 6 反(1.6ha)の田があった。在所には「結い」はなかったため、苗取りと田植えに女性を雇っていた。

「田植えは、娘の多い家は楽にできたが、男が多い家は苦手。収穫の時は息子が多い家は楽になる。生まれてくる子供によって家が楽になったり、えらいめ(苦労)をする。男の子が多いと父親が楽をして、女の子が多いと母親が楽をする。わしの家は兄弟 5 人、父、母、オジイ(祖父)、オバア(祖母)で、男 7 人、女 2 人。女手がないので、苗取りと田植えの日雇いを頼んできた」。

戦前から戦後まもなく、苗取りと田植えの女性の日雇いを、在所で飯米百姓¹をしている 4 軒から各家につき一人ずつ頼んでいた。頼みに行く時は「頼むでよ」と言うだけだったが、田植えが終わったら砂糖を持ってお礼にいった。その後、A さんの父親の知り合いの紹介で、野田(現在、野洲市野田)から苗取りに 2 人、田植えに 4 人を 4 日間雇い、車で送り迎えをした。

「日雇いをお願いするために、その年の正月に品物を持って野田にお願いにあがる。野田から来てもらうのに、苗取りや田植えをしたい女の仲間のボスに頼むと、全部済ましてくれる。品物は箱入りの砂糖(2 斤入り)で、ボスに日雇いの女の各々に配ってもらう。苗取りか田植えが始まる前に、また砂糖をもってお願いにあがった」。

日雇いの労働時間は朝 8 時から 5 時までで、昼飯は仕出し屋に簡単な弁当を注文して田に運んだ。代金は最後にまとめて支払った。1 日 1 反を植ええられる者は重宝がられた。一人につき日当が 1 万円と高いので、「おなご(女)の手を遊ばすと高い費用を払うことになる」といわれていた。

こうした苗取りと田植えの日雇いは、1970 年頃、田に機械が入ってから終わった。(つづく)

注 1 自給用の米を耕作しており、田の所有面積は 2~4 反だった。

在所を支える一体性と個人

朽木 FS 増田 和也

在所の暮らしの多くの部分は、全世帯が一体となることで維持されている。余呉・摺墨（するすみ）で水田作業や神社の行事にお邪魔させていただくのか、こうした側面を目にする機会は少なくない。

その一例は田に引く水の管理である。田の水は、集落を取り囲む山々から流れ込むいくつもの沢に「ユ」とばれる堰をたて、細い水路を通じて引かれている。こうした水路は単一の田のためのものではなく、いくつもの水田が共同で利用する場合が多い。このような水の分配と管理では、複数の水田所有者による集団性が前提となる。

この他には電柵の管理が挙げられる。近年はサルやイノシシによる稲の食害がひどいため、稲が出穂期を迎えると、水田を電柵で囲う。しかし、電柵というのは、ひとたび張ればよいというものではない。電柵を張った後に大切となるのは草刈りである。というのも、草や蔓が電柵に触れると、それらを通じて漏電してしまうからで、電柵の効果を低下させないためには、夏の日差しの下で旺盛に伸びる蔓草をこまめに除く作業が欠かせない。摺墨では複数の水田をまとめて電柵で囲っており、ここでも在所が一体となるような集団性が生まれることになる。

さらにもう一つは、県が窓口となって進める「集落協定」事業*である。これは、現在耕作している耕地を5年間は放棄しないという協定のもとで、在所に補助が下りるというものである。これには在所全戸の賛同が条件であり、協定期間内に一戸でも耕作を断念すると事業規約に反することになってしまう。ここでも集落内の水田を一枚でも放棄しないという一体性が求められる。

このように、今日においては新しいかたちで在所の一体性が求められている。とはいえ、それを保つには心もとない状況にあるのも事実である。たとえば、畦の草刈りは各耕作者がそれぞれの田を世話することになっている。しかし、電柵に蔓草が触れると電柵全体の効果が低下してしまうように、個々人による世話が十分でない場合には在所の一体性には

ころびが生まれることになる。高齢化は摺墨でも例外ではない上に、住居を集落外に移している人もおり、日常的な田の守りが徹底できないことがある。こうした問題は集落協定の維持にも関係してくる。現在は高齢者が耕作している田が、数年後も同様に耕作されているかどうかは不明だからである。

こうしたなかで、在所の一体性を維持するために中心的に身を動かしているのが、在所の壮年層である。毎週末は草刈り機を下げて水田一帯を廻り、他の人の田であっても電柵付近の草をさっと刈っていく。また、耕作が困難な世帯の田については、委託のかたちで耕作を継続させている。耕作委託は個人で引き受けることもできるが、個人では負担が大きすぎることもある。そこで受入に向けての体制を整えようと、壮年層の3人は小さな組織を結成した。その名も「Do(ドゥ)いなか」である。「洒落た名前です」と言う、「『ど・いなか』ということや」と3人は冗談まじりに笑う。

自然という大きな相手と向き合うからこそ、在所の一体性は必要となる。「ユ」や電柵の設置・撤収など単発的な作業は普請によっておこなわれ、共同作業が生み出す力は大きい。その一方で、一体性が個々人の心配りやアイディアによっても支えられているということにあらためて気がつく。



田植えの後に、「Do いなか」結成を記念して(撮影:島上宗子)

* 正確には、「中山間地域等直接支払事業」による集落協定

亀岡の農業と自然（5）

「クールベジタブル農業体験塾」

亀岡 FS 大西信弘

亀岡市の保津町は、町民が主体となって、『かわまちづくり、「生きもの共生」で町おこし 保津川すいたん農園プラン』を進めています。生きものと共生する農業が生み出す、安全・安心な作物を看板にふるさとの産品を生み出していこうとがんばっています。

その企画の一つ、農業体験塾が10月9日に始まり
ました。私も、一、塾生です。自給とまでは行かなく
ても、いくらかは自分で作った野菜を食べるという暮
らしを実現したいと考えていたのですが、京都市内に
暮らす私には農地もなく、農業技術ありません。そ
んな私にとって、農業のプロからアドバイスをもらい
ながら、素人が土いじりの楽しさを味わえるという農
園は、楽しく野菜の自給を始めるきっかけとしてもっ
てこいです。

いるそうです。最初、松實さんに作業手順を実演していただいて、その後自分たちで作業します。恥ずかしいことなのですが、これまでネギの種はみたこともありませんでした。ゴマよりももっと小さく、土に蒔いたら土の隙間に入ってしまう、どこに行ったかもわからなくなってしまうような大きさです。この小さな種が水と二酸化炭素で、ネギになるのかと思うと、感慨無量。野菜も生きものなのだなあと強く実感しました。四十余年間、土の恵みということを実感することなく生きてきたということなのですが、おそらく私だけではないのでしょう。8mの畝を5本、担当して、白菜、水菜、キャベツ、ブロッコリー、ネギ、菜の花の苗や種を植えました。

毎日、様子を見に行かなければと思いつつも、天気が悪かったりして、のびのびになってしまいました。が、間引きに行きました。植えた種は元気に発芽していたし、移植した苗もほとんどが元気に根付いていました。一部、虫に食われて丸裸になった苗もありましたが、虫も食べるほどおいしいということでしょう。間引き菜（間引いた苗）は、ベビーリーフのサラダで楽しもうと思います。

今回は、募集期間も少なく、8組の応募にとどまっているのですが、街に住み、農業に関心があるけれどそのきっかけがないと思っている人たちに参加して楽しんでもらえたらと思います。今回の募集は、来年3月までの期間の農園ですが、来年も春～夏バージョン、秋～冬バージョンを企画して、春～夏バージョンには、農業塾だけでなく、小学生の夏休みの宿題応援企画なども組み合わせて、都市と農村の交流、農業と自然の共生、土地の恵みを実感する暮らしなどを実現、実践していきたいと考えています。

最後に、今回の農業塾では、おまけに水車でついた保津のお米、「ほづのひかり（ひのひかり）」をいただけるのですが、これも今後の楽しみの一つです。保津のお米は、ほんとうにおいしいですからね。



写真 間引き菜。おいしそうでしょ？



かわまちづくり 保津川すいたん農園

福岡県三井水産株式会社 協賛

「食と健康」をテーマに

鍋野菜



を
つ
く
っ
て
み
よ

地球にやさしい クールベジタブル? 農業体験塾



http://coolvege.com 福岡県三井水産株式会社 http://www.mimizu.jp



野菜先取 人数 **30 日** ー **20,000 円** 家族・グループでの参加もOK
(つぎから先取額 1月500円/人 (2000円/月) 3ヵ月 4000円/人)

クールベジタブル™ 野菜づくり (ハウス&露地) コース

平定23年 10月ー 平定24年 3月までの7ヵ月
 日曜日の午前中 (午前9時から正午まで) ①回開催
 (開催日は作物の生育具合などにより変更の可能性がございます)
 開催期間中 (10月ー3月) の露地農場へ、自由出入りができます
 参加日数10日間 (10月ー12月) は農具類等が露地に在中予定
 〒821-0005 鳥羽町保津町1丁目
 (Jリウ農園より保津大橋を渡りすぐ右下の露地)
 ビニールハウスと露地農場 (露地内にはトイレを2基設置)



農業初心者歓迎

鍋野菜



を
つ
く
っ
て
み
よ

●開催スケジュール (予定)

10月 9 日 (日) 開塾式 顔合わせ 農作業
 11月 0 日 (日) ① 12月 1 日 (日)
 平成24年 1月 31日 (土) ② 2月 5 日 (日)
 平成24年 3月 1 日 (日) 収穫感謝祭 (食事会) 閉塾式

毎回、定例会場内三城城公園 南市民農園(定例会場センター裏) 参加費員外500人に講師としてお招き致します

会場案内



①保津川を渡り
保津川すいたん農園
に到着し、駐車場へ
向かう。駐車場へ
到着後、鳥羽町
役場へ

②保津川を渡り
保津川すいたん農園
に到着し、駐車場へ
向かう。駐車場へ
到着後、鳥羽町
役場へ

鳥羽町

参加費員外500人に講師としてお招き致します

作付内容 (予定) 水菜、春葱、大根、菜の花、白ねぎ、玉ねぎ、などなど

作付内容には主催者側で決定し、統一内容で実施します

**ビニールハウス
2週間農場 (野外)**

参加者全員で協力して、お園などに使えるお野菜を育てます
各自でエリアを分けし、野菜づくりをチャレンジします
①初めに決められたエリアで、2週間栽培にあたる予定です
基本的には各自でお世話頂きますが、ごく稀に担当が手直し致します
(露地農場でも各自が育てたクルベジ野菜は、お持ち帰り頂けます)

申し込み方法 先着300名までの受付ですのでお早めに!

9月23日 (金) までに、電子メールまたは往復はがきにて
氏名(ふりがな)・年齢・性別・住所・電話番号
お申し込みのうえ、連絡先メールアドレスを記入の上、下記まで

〒821-0005 鳥羽町保津町1丁目53番地
 保津川自治会 事務局
 お問合せ (担当：中野) 携帯 090-3620-7210



主催 保津町自治会

協力
 福岡県三井水産株式会社
 保津川自治会 ちくちくビジョン推進会議
 鳥羽農会法人 保津川すいたん農園

「農業体験塾」募集チラシ

詳しくは、<http://ameblo.jp/hoduchou/> をご覧ください。

塾の講師を務めるのは、松實能文(まつみよしふみ)さん。以前は、財団法人自然農法国際研究開発センターにおられて、現在は亀岡で自然農法にとりくまれて

催しのご案内

■ 39 回 定例研究会

1. 日時：平成 23 年 11 月 28 日（月）16:00～19:00
2. 場所：守山 FS（滋賀県守山市梅田町 12-32）
3. 最終報告書草稿の発表および検討

* 参加希望者は、京都大学 東南アジア研究所 実践型地域研究推進室
担当：矢嶋 yajima@cseas.kyoto-u.ac.jp）までご連絡ください。

■ 第 1 回大川フォーラム 『「里川里湖のまちづくり」から ～住民、研究、行政の協働』 開催のお知らせ

1. 日時：平成 23 年 12 月 3 日（土）14:00～（予定）
2. 場所：美崎自治会館 多目的ホール（滋賀県守山市今浜町）
3. プログラム：基調講演、事例報告、パネルディスカッションほか
問合せ先 守山市役所みらい政策課

または、京都大学東南アジア研究所実践型地域研究推進室 矢嶋
詳細は、ホームページおよび次号のニューズレターでお知らせします。

ラオス活動報告 7 タチャンパ村への定住

生存基盤科学研究ユニット研究員 矢嶋 吉司

これまでタチャンパ村の集落民俗文化資料館建設や村での参加型ワークショップの開催などを報告してきた。現在、ラオス国立大学農学部先生と日本人研究者が村人の協力を得て村の記録を残す試みが始まっている。ここでは、村に定住する経緯を人々の記憶を通して再現してみたい。

ビエンチャン県ヒンフープ郡ポントン村に住んでいた時、森を切るのが禁止され同じ土地で短期間に繰り返す焼畑からは良い収穫が得られなかったため、水田ができる新しい場所を探していた。1988 年のはじめ頃、水があり水田をやっていない土地があることを、ブンテン村（タチャンパ村の隣）の親せきからビエンチャン県ポンニャン村の住人が聞いた。

1988 年 2 月頃、ビエンチャン特別市ナターン村の東南隅のブンテン村との村境あたりの、その頃、ニャンティアンと呼ばれていた土地を見るために、ポントン村から 3 名、ポンニャン村 1 名の計 4 名でやって来た。あたりには大ノンゴンと小ノンゴンと呼ばれる 2 つの沼があり、沼の間には草原が広がっていた。

ニャンティアンに来て 2 日後、ポントン村の 2 名は水田が開けそうだという知らせをもって村に帰り、移住を希望していた 10 世帯にその年の焼畑の準備をやめさせ種もみを確保させた。残った 2 名はブンテン村の親せきの家に泊まり、みんなが来るのを待っていた。

さらに 3 日後、10 世帯の 10 人でニャンティアンにやって来た。最初に 10 人全員が泊まれるような大きな小屋を建て、1 日全員で伐採した土地を 1 世帯分の焼畑地として 10 日間働いた後、移住申請の手続きを進めるため一旦全員で村に帰った。その時、村を出てから帰るまでの日数は移動を含め 15 日間だった。

移住予定者全員の名前と農業・水田のためという理由を書いた移住申請書類を準備し、村長のサインをして行政区、郡、県へと順番に許可をもらっていった。許可を得るために 10 数日要した。

県役所の許可をもらいにビエンチャンに来た際、自動車を手配できたので、急いで村に帰り引越しの準備を始めた。10 世帯がそれぞれ家の解体や荷造りを 1

週間で終え、引越しが始まった。いすゞのトラックを 1 週間だけの約束で借りていたので、昼夜休む間もなく家財道具や家屋の資材、ニワトリや豚など小家畜を車で運んだ。ニャンティアンへは、荷台に乗った女や子供が道に覆いかぶさっていた木の枝をかきわけて、ようやく通ることができるような狭い土の道があった。1 回に 1 世帯、小さな世帯は 1 回で 2 軒分運ぶことができたので、1 週間で 10 世帯すべてが引っ越すことができた（この 10 世帯は今も村に住んでいる）。牛や水牛などの大型家畜はあとから歩いて連れてきた。新しい土地に着くまでに、牛は 4 日間、水牛は歩くのが遅く 5 日間掛かった。これらは 1988 年 5 月（ラオス暦の 4 月頃）のことだった。

10 日ほど遅れて、同じようにポンニャン村からも 26 世帯が移住してきた（洪水や旱魃のため生活が苦しく、数年後 10 数世帯が元の村に帰ってしまった）。

1988 年の終わり頃、土地を譲り受ける交渉を近隣の村と行ない、ナターン村から 142ha、ブンテン村から 19ha が分けられ、タチャンパ村（名前が決まるのはもう少しあとになるのだが）が始まった。大ノンドンはナターン村、小ノンドンはタチャンパ村の所有となった。毎年 500～600 万キップの魚が小ノンドンから獲れ、村の大切な収入源となった。

移ってきた頃、2 つの沼の間では、以前から住んでいた 3 世帯が小さな畑を耕しサトウキビ、パパイヤ、キュウリなどを栽培していた。周囲にはサルスベリやフタバガキ科の大木が茂り、水牛も通り抜けられないほど鬱蒼とした森だった。森には尻尾を振る短い猛毒のヘビやオオトカゲがたくさんいた。

政府の共同水田政策（作業や収穫を点数で評価する方法をとっていた）で 8 世帯が入植し水田を開いたが、まわりが森だったためか、ねずみや野鳥の害などで思うような成果が得られなかった。その上、共同水田は 1 年間放置すると手がつけられないほど雑草が生えた。入植させられた農家はそれぞれ元の村に水田を持っていたので、共同水田をやめ 5 世帯は村に帰り、この 3 世帯が残っていたのだ。（つづく）

本報告は、現地在住の虫明悦生さんと京都大学大学院農学研究科院生亀田知佳さんに調査に協力して頂き、村の草分け 5 世帯の 5 人の話をまとめた。